

—国際交流研修派遣印象記—

第9回世界核医学会議に参加して

(財)星総合病院 続 橋 順 市

2006年10月22日から27日まで韓国のソウルにおいて第9回世界核医学会議(WFNMB)が開催された。この会議は4年に一度開催され、世界各国から核医学に関連する様々な職種の人達が一堂に会する会議である。今回の参加人数は75ヶ国から3,000人を超え、発表は口頭・ポスターを合わせて約1,000題にもなった。

このような大規模な学会に参加する為、日本核医学技術学会東北地方会では仙台空港発着の3泊4日のツアーを企画した。この企画は日本核医学技術学会において国際交流派遣委員会担当理事を務めているいつも心は旅人である岩手医科大学付属病院の長岡宏明氏の発案によるもので、初め聞いた時には半信半疑だったが長岡氏の積極的な勧誘活動と有無をも言わずに圧力が功を奏し4名の参加希望があり、何とかツアーの催行にこぎつけた。参加者は岩手医科大学付属病院の斎藤誠氏夫妻、長岡宏明氏夫妻、福島県立医科大学付属病院の加藤和夫氏、星総合病院の続橋の計6人である。

ソウルへの出発は10月22日(日曜日)の昼であり、スーツケース1つとカミさんから貰った僅かな小遣いを持って仙台空港へ向かうと、空港ではあちらこちらに高名な先生方がみうけられこの学会の規模の大きさと、学会が持つ意義の深さをあらためて感じさせられた。

仙台空港から韓国の仁川空港までのフライト時間は約2時間であり、日本との時差もない。空港からホテルへ向かう途中ソウル市内の焼肉屋で夕食を済ませ、旅の疲れもあり次の日の学会に備えその日は就寝した。

ツアー二日目の学会初日は受付から手間取ってしまった。当初ウォンで参加費を払おうとしたがドルだけと言われ急遽カードで払うようになってしまったり、登録証も英語の筆記体で書いたが私の字があまりにも汚く受付で判読できずブロック体で書き直したりした。このように色々手間取



長岡氏と展示ブース前にて

りながらやつの事で登録を済ませ展示ブースに入るとそこには世界各国の企業の製品が展示しており、ブースの数としては200弱であった。やはりカメラ装置メーカーが大きなスペースを占めていたが、サイクロトロンや計測装置、ファントムなども置いてあり見ていて飽きないものであった。しかしながら英語を聞く、話す事が出来ない私にとってはいささか居づらい場所でもあった。

展示ブースの奥にはポスターが展示されており学会を通じてPETにおける腫瘍の演題が多かったように思われる。日本と同様に世界的にもPETが注目を浴びており、今後もこの傾向は続くものと思われる。

またその日にはDRL(第一ラジオアイソトープ研究所)と学会が共催のランチョンセミナーがあり参加をしてきた。ここでは日本核医学技術学会と韓国核医学技術学会からそれぞれのテーマについての講演があり、日本からは福喜多博義会長が「The Recent Progress of Nuclear Medicine Technology in Japan and Korea—Outline of situation in Japan—」と題して日本における核医学検査の動向について、岐阜医療科学大学の片渕哲朗氏は「Perspective of Nuclear Cardiac Technology」と題し、心筋血流SPECT画像を例として画像の

標準化について、大阪府済生会野江病院の松浦基夫氏は「Radioactive Tracers and Analysis Software In Cerebral Blood Flow Scintigraphy」と題し I-123 標識による 2 つの脳血流製剤の違いと、日本で使用されている脳血流統計解析ソフトウェアについてそれぞれ英語で講演を行った。

韓国の学会からは RI および PET 検査の現在の動向について講演があったが、全体的にカメラ保有施設数や検査件数などは日本に比べると低いようであるが、着実に増加しているようである。

また、今回私には学会の他にもう一つの目的があった。それは某メーカーによるユニバーサルタイプの FPD の見学である。当施設の技師長が以前から興味を示していたがこの装置は現在日本にはまだ導入されておらず、それがたまたま韓国の某大学病院に導入されておりこの機会に病院関係者や業者の方に無理を言ってみ学させてもらった。大学病院では放射線技師の方に親切丁寧に説明をして頂き、大変お世話になった。見学の内容はここでは触れないが他施設を見学するという事はやはり刺激になる。他国の施設ともなるとなおさらである。良くも悪くもその国の医療における現況や、放射線に対する考え方を推し量る事ができる。2, 3 時間位しか見学できなかったが、なかなかこの様な機会に恵まれる事は少なく私としてもとても有意義な時間を過ごせたと思う。

ツアー四日目の午前中には韓国から出国したが、この第 9 回世界核医学会議に参加する事ができとても貴重な経験となった。なかでも痛感したのはやはり語学力である。自分の語学力の無さに

はとても落胆した。帰国して真面目に駅前留学しようかなと考えてしまった程である。世界大会に参加や発表するためには必要最低限の条件であり、今後の私のスキルアップのための課題となった。

また今回は東北地方会だけの企画ではあったが、今後このような機会があれば日本核医学技術学会全体としての企画があってもいいように思われる。他国や他学会の方々へ日本核医学技術学会の活動をアピールできると思われるし、他施設の方と行動を共にする事で交流を深める事ができる。そこに他国の施設見学なども含まれれば充実した内容になると思われる。

次回のこの学会は 2010 年に南アフリカで行われる。4 年後カミさんに南アフリカに行ってくると言ったらかなり怒られそうだが、南アフリカの医療や核医学検査の現況なども大変興味がある。また南アフリカではサッカーのワールドカップが行われる年でもあり、2010 年の南アフリカは色々な意味で熱そうである。

最後にこの様な機会を与えてくれた日本核医学技術学会東北地方会に感謝を申し上げたい。またこのツアー中斉藤誠夫妻、長岡宏明夫妻、加藤和夫氏には大変お世話になった。この場を借りてお礼をいいたい。特に奥様方々は大変旅行慣れしており色々と教えてもらった。

ただ帰国時に空港の税関で私だけがスーツケースを開けさせられた事が今でもいささか疑問に残る。